怒りを可能にするために

—— 木村友祐『イサの氾濫』論

加島正浩

✉ skaskagoto@shikon.meiji.ac.jp

The purpose of this paper is to evaluate Yusuke Kimura *Isa's Deluge*, who depicts the Great East Japan Earthquake, as an important work that describes the changes in people's lives after the earthquake, taking into account the uniqueness of the region.

First of all, we point out that some novels adopt a form of criticism of the structure of exploitation in describing the Great East Japan Earthquake. However, we criticize that these novels do not take into account the current state of “affected area” and thus cannot find an opportunity to change the structure of exploitation.

Therefore, we focus on *Isa's Deluge* which describes the problem of loneliness in Hachinohe, “affected area” after the earthquake. We then show that *Isa's Deluge* describes the cause of loneliness as an inferiority complex to Tokyo, and that “relative superiority of words” is the cause of the inferiority complex. In order to overcome the post-earthquake problems associated with the structure of exploitation, *Isa's Deluge* is evaluated as a text that attempts to change the relationship with Tokyo by letting people know that they are in trouble through their own words.

Keywords The Great East Japan Earthquake(東日本大震災), Yusuke Kimura (木村友祐), *Isa's Deluge*(イサの氾濫), The Structure of Exploitation (搾取の構造), Southern Dialect(南部方言)

1 はじめに

東日本大震災から8年が経過した現在、小説において表象される震災は震災発生直後のそれとは異なる様相をみせている。千葉一幹は震災直後の作家は「津波の圧倒的な迫力を前に失語状態へと陥」ったり、「言語化へのためらい、言語化することへの忌避感」をみせていたりしたが、現在は震災を題材とした虚構の小説が陸続と出版されているとし、小説を取り巻く空気感の変化を指摘している。¹また「震災後文学」という語を使用する木村朗子は「震災後文学というのは、震災後に震災を扱って書かれたものだけをさすのではなくて、震災後の文学状況全体をさす。たとえば震災後にさかんに第二次世界大戦を扱った戦争小説が書かれるようになったことをも含めて、歴史の再考を迫るものが現われたのも震災後の文学状況だろう」²と指摘し、地震や津波、原発事故にとどまらず、東日本大震災以後の問題系を読み解き、論じる軸の必要性を述べている。

木村が述べるように東日本大震災に直接の言及がなくとも震災後の問題として考察すべきテキストは存在する。しかし千葉が指摘するような東日本大震災を言語化することへのためらいが東日本大震災に直接言及することなく、震災を表象しようとする力学をもたらしているとも考えられる。

たとえば江島周『災神』³(2017)はミズチという未知の巨大生物によって「被災地」となった出雲で救援活動を行うために送り込まれた若い自衛官、新野陸士を中心に展開する小説であるが、そこで描かれる「災厄」は大量のメタンハイドレートとともに見つかったミズチの存在を、石油に代わるエネルギー資源を独占したい日本政府と日本企業が隠蔽し、ミズチの仮死状態を独力で保つために導入した冷却設備に不備が生じたことに起因する。冷却設備の故障による「災厄」の発生は原子力発電所のメルトダウンを思わせ、ミズチが出雲を破壊するさまは「目前を疾駆する破壊の力が、想像もしなかった速度で出雲を呑み込んでいった」⁴と描写され、それが津波を想起させることから東日本大震災を踏まえた小説であるとみなすことができる。しかしテキスト内には東日本大震災への言及が一切なく、自衛隊が人道支援活動に貢献していることが述べられる箇所でも「阪神大震災や中越地震、そして海外への人道支援活動でも無類の能力を発揮し」たとのみ語られ⁵、東日本大震災への言及は不自然なまでに避けられる。ミズチの「災厄」によって東日本大震災以後を表象しようとする意図を感じるが、震災を代替して描くことには問題もある。

本稿ではまず地震や津波、原発事故ではない別の要因によって「被災地」を作り出す小

¹ 千葉一幹「人は震災にいかに向き合ったか——メランコリー・カタリ・喪の作業——」(『文藝界』70(11), 2016.11).

² 木村朗子『その後の震災後文学論』(青土社, 2018), p.26.

³ 江島周,『災神』(角川書店, 2017).

⁴ 江島周, 前掲書, p.7.

⁵ 江島周, 前掲書, p.35.

説や、時間軸を執筆時からみた近／未来に置き換え「汚染」された地域・空間を用意する小説に共通する定型を、桐野夏生『バラカ』⁶(2011-2015)、島田雅彦『カタストロフ・マニア』⁷(2016-2017)、恩田陸『錆びた太陽』⁸(2015-2016)を分析することによって抽出する。そしてその定型が政府や大企業が一方的に、不可視化された「汚染」地域から経済的利益を搾取する構造を描く目的をもっていることを明らかにする。しかし上記に挙げたテキストは、搾取の構造を指摘するにとどまり、搾取が行われ続けている具体的な「被災地」の様相に触れていないため、搾取の構造が中央と「被災地」とのあいだで構築された原因や構造自体を是正していく端緒を見出せずにいるという問題点がある。その問題点を克服するために、本稿では木村友祐「イサの氾濫」⁹(2011)を取り上げる。「イサの氾濫」は東日本大震災の津波の「被災地」であるが、そのこと自体が忘却されがちである八戸を舞台に、そこに住む人々が孤独に追い込まれていることを告発する。その後、八戸が抱える孤独を、震災後の東北が抱え込んでいる問題へと拡張し、孤独が生じた原因が中央＝東京への劣等感にあることを、またその劣等感を作り出した根本の理由に「言葉」の問題があることを指摘する。そして最後に搾取の構造と絡み合った震災後の問題の一端を克服するために「イサの氾濫」が示した、土地の記憶である蝦夷というイメージを「借用」し、南部方言で怒りを表明するという方法と可能性を明らかにすることが本稿の目的である。

2 問題提起——不可視化される「被災地」と搾取の構造——

震災の原因を代替したり近／未来の日本に時間軸を置き換えたりする小説に共通するのは、政府や大企業が政権維持や利権のために情報を隠蔽するという定型である。

『災神』は日本政府と大手企業がミズチを隠蔽したことによる「災厄」を描き、震災から8年がたち「汚染」が群馬県まで広がり、首都機能が大阪に移動した日本を描く桐野夏生『バラカ』では、「原発事故が何でもないとアピール」したい日本政府や大企業によって、情報は隠蔽・統制されている。原子力発電所のメルトダウンに加え、ウイルス・テロによるパンデミックが起こった2036年の東京を舞台とする島田雅彦『カタストロフ・マニア』では、危急の事態を乗り切るために「全権を首相に集中させ」、「権力の維持を最優先」したが、対応が後手に回り放射能汚染の面積が拡大した結果、「この致命的な失策を隠蔽するため」政府が情報統制を行ったとされている。恩田陸『錆びた太陽』においても政府関係者と外資系企業が手を組み、核廃棄物を引き取ることで外貨を獲得しようとする

6 桐野夏生『バラカ』(集英社、2016)。

7 島田雅彦『カタストロフ・マニア』(新潮社、2017)。

8 恩田陸『錆びた太陽』(朝日新聞出版、2017)。

9 初出は木村友祐「イサの氾濫」(『すばる』33(12), 2011.12)。引用は木村友祐『イサの氾濫』(未来社、2016)。なお引用時に振られているルビは、すべて引用元に振られたルビそのものである。

「護美箱計画」が内密に進められており、資本と権力が結託し、情報を隠蔽する定型が採用されている。つまりその定型を採用し「汚染」された地帯を舞台にすることで、経済的な利益を一方的に搾取する構造があることを示そうとしているといえるだろう。

そのことは『バラカ』では「グローバル企業と国と電力会社」が「金を一銭も払うまいと」原発反対派を「一人ずつ消そうとしている」と、まず語られる¹⁰。そして個人の力ではどうにもならないほど大きな金を動かす巨大企業と権力¹¹によって放射線量の高い地域で被爆させられたために、首に傷をもつ薔薇香が「フクシマ」に生きる元気な子供の象徴として「原発事故が何でもないとアピールしたい人」のために利用されると述べられる¹¹。そして『カタストロフ・マニア』では、「資本の原理」によってウイルスのワクチン投与は貧困層が後回しにされるという予測がなされ、パンデミックが「製薬会社にとって、大きなビジネスチャンス」であるため、そのきっかけを与えたテロリストと「裏でつながっていることを勘ぐりたくもな」と語られる。加えて「貧困層や高齢者の人口が減れば、福祉や医療にかかるコストも軽減されることになり、政府はウイルス蔓延を政治利用して、恣意的に人口調節を図ろうと考えているかもしれません」¹²とも述べられる。両作とも資本の原理に基づく巨大な権力が、都合の悪い人間の生を迫害し、機に乗じて経済的利益を搾取するものとして敵視されている。そして『錆びた太陽』での「護美箱計画」は「汚染」地域に核廃棄物を押しつけることで利益を得ようとする搾取の構造以外の何物でもない。

経済的利益を一方的に搾取する構造が「汚染」された地域を舞台に描かれることの背景には、福島第一原発の事故により不可視化され続けていた一方的な搾取の構造が浮き彫りになったことが関係するだろうし、そこに着眼するのは必要なことでもある。しかし上記に挙げたテキストは確かに搾取の構造が存在する日本の現状を突いてはいるが、搾取が行われ続けていた「被災地」の具体的な様相に触れることがない。『バラカ』や『錆びた太陽』のように「被災地」を人が住まない「汚染」された地域としてのみ設定する、あるいは『カタストロフ・マニア』のように未来の東京を舞台にするのみで、具体的な地域性や歴史性を問題にしない態度では搾取の構造を指摘することはできても、その構造が何に由来して常態化したのかを見極めることや、それを是正する視座を得ることは困難である。中央がある地域を周縁化し、そこから利益を吸い取るのが搾取の構造であるが、「周縁」の一言で問題化するのみでは、そこから多くのものが零れ落ちてしまう。

そこで本稿では八戸という東北の一地域を舞台にした木村友祐の「イサの氾濫」を取り上げる。「イサの氾濫」は東京になじめず故郷の八戸に帰省した将司の視点より描かれる。将司は震災後40歳にして仕事を辞め、夢に現れるようになった叔父イサのことを震災の爪痕が残る八戸で調べはじめる。従兄の仁志、父の友人である角次郎から話を聞く

¹⁰ 桐野夏生 『バラカ』(集英社, 2016), p.357.

¹¹ 桐野夏生, 前掲書, pp.452-461.

¹² 島田雅彦 『カタストロフ・マニア』(新潮社, 2017), p.51.

ことで、将司はイサの人物像を作り上げていく。またその過程で、津波で配偶者を亡くした旦那の話を聞いたり、津波から逃げ遅れていた人々を助けた沢田をたたえる名目ではじめて開かれた中学校のクラス会に参加したりすることで、八戸の人々の震災後の心境を将司は知ることになる。そして震災と原発、風評被害で苦しみ続けているにもかかわらず、東京や日本を責めることがないクラスメイトにやるせなさや怒り、哀しみ、寂しさがないまぜになった感情を抱いて、クラス会を飛び出した将司はイサと想像上で同一化する。イサとなった将司は、同じように悔しい思いをさせられた者たちとともに想像上で南へと下り、国会議事や首相官邸、そして電力会社の本社ビルなど、富が結集した高層ビルを倒壊させる、というのが大まかな「イサの氾濫」のあらすじである。

「イサの氾濫」は津波被害のあった八戸を舞台にしており、たびたび原発やそれによる風評被害などに触れられはするものの、主題にはなっていないようにみえるため、上述したテキストとは、かみ合わないようにみえるかもしれない。しかしながら「イサの氾濫」は中央＝東京が東北という地域から搾取を続けていたことを指摘しており、原発立地地域で起こっている搾取とは異なる角度から搾取の構造を問題化したテキストであるといえる。

原発立地地域が構築させられている搾取の構造は各地域ごとに異なり、それはさまざまな角度から検証することが必要になる。福島第一原発においても、原発立地地域に共通する構造の分析や、中央＝東京と福島県との関係に着眼し、原発立地地域の特殊性を重要視した分析、さらに福島県内の地域差を微細に捉え、会津・中通り・浜通りと三つの地方に分割し、原発が立地された浜通りの地域性を分析する方向性など、角度や着眼する地域の大きさを変えながら多視的な分析を組み合わせなくては、不可視化される問題が生じてしまう。

そこで本稿では、東北という地域区分の大きさに着眼することで、明らかになる問題と可能性を、「イサの氾濫」を分析することで提示したい。「イサの氾濫」は東北の一地域である八戸を舞台に震災後の孤独という問題を浮き彫りにした後に、八戸にみられる問題を東北の問題へと拡張している。被災した一地域の孤独を東北へと視線を拡大してみせることで、その孤独がより強固なもので、東北全体に共通する問題であることが示される。そして同じ問題の克服を目指すという目的を共有できる可能性に賭けて、孤立しているようにみえる個々の地域を結びつけようとテキストは試みている。本稿はテキストが示す東日本大震災の被災地としての八戸が抱える問題を分析した後に、それを東北へと広げることで示された問題と可能性を明らかにしたい。

3 震災後の不可視化される孤独と東京との関係

「イサの氾濫」はまず東北の被災者の心情を、南部方言を用いて描いた点が評価されてきた。具体的には「東北人の微妙な思いを正確に書いた小説」と評価した池澤夏樹¹³をはじめとして、「自らの不全感、東北被災の悲しみ、復興ムードへの違和感。整理のつかない感情を、南部方言を全開にして吐き出した」¹⁴、「あれほどの痛みを背負っても一つになって拳を振り上げることをしない、自身も含めた東北の民への屈折した思い。いつも弱者の立場に甘んじてきた人々の静かな意地」を描いた¹⁵といったものである。さらに単行本収録時に結末部が変更されていることに言及し、そこには初出時よりも排外主義が蔓延し悪化した社会情勢や、「被災地」の内と外との関係性の固定化が関係しているとした岡和田晃¹⁶や「イサの氾濫」にはひとりの人間が存在するうえでは免れない「歴史と地理と言語と階級」の影響が明確に描かれているとする菅啓次郎¹⁷などの、重要な指摘もなされている。確かに岡和田が指摘するように固定化された「被災地」の内と外との関係性を打破することがテキストでは目論まれ、打破すべき関係性には菅が指摘する通り「歴史と地理と言語と階級」の影響が見て取れる。しかし「被災地」の内外の固定化をもたらした原因のひとつに「言葉」の問題があることは、二人の論者の指摘を踏まえて詳細に分析すべきである。また、そのこととテキストが青森県の八戸を舞台にしていることにも関係があり、その点には未だ仔細に分析されるべき余地がある。周知のとおり東日本大震災の被災県としては宮城・岩手・福島県が挙げられるのが主であり、八戸が話題に挙がることは少ない。にもかかわらず八戸が小説の舞台として選ばれていることには注意する必要がある。そこで初めに震災後の八戸という場所がテキストの中でどのように捉えられているのかを確認したい。被害の中心と考えられている地域からはずれた八戸という場所が、八戸の出身ではあるが震災発生時には東京に居住していた将司によって、まず以下のように捉えられる。

でも、それでも結局、八戸では震災による死者はひとりだった。被災地には変わりはないが、街が壊滅状態となって何千人も犠牲者がでたようなほかの場所に比べたら、被害は軽微である。(略)被災はしたけれど、ほかとくらべたら被害は軽いです、どうもすいません。と、妙に卑屈な気持ちになっている自分がいた。

このねじれた感情は一体なんなのかと思うのだが、今、こうやって目の前に津波の傷跡を突きつけられても、根本的な戸惑いは変わらなかった。ぼりぼり頭をかくイメージで、心のなかで将司はつぶやく。

¹³ 池澤夏樹「私の読書日記」(『週刊文春』58(16), 2016.4)。

¹⁴ 「文芸月評——震災と向き合う中短編 生活者の視点、近代史の観点——」『読売新聞』(2011.11.22,朝刊)。

¹⁵ 「回顧 文芸」『朝日新聞』(2016.12.7,夕刊)。

¹⁶ 岡和田晃「『がんばれニッポンっ!』という空白を埋める——木村友祐『イサの氾濫』——」(『反ヘイト・反新自由主義の批評精神——いま読まれるべき文学』とは何か——』寿郎社, 2018), pp.309-310。

¹⁷ 菅啓次「巨大な次回作を予感させる」(『図書新聞』3259, 2016.6)。

……でもさあ、これだけなんだよね¹⁸

津波被害と死者がいるにもかかわらず、ほかの場所の被害が甚大であったため、相対的に被害は軽微な「これだけ」だと捉えられる。それは将司が意識するように「ねじれた感情」である。しかしその「ねじれ」は「ひとり」を亡くした近親者にとっては「ぽりぽり頭をかく」だけでは終わらない。

旦那は、新聞さ、『悔しい』って喋ってらった。おそらぐ、カガの気持ちちが手にとるようにわがってだんだべ。それでも、『自分だけでなく、つらい思いをした人はたくさんいる』って言うわけよ。その孤独^{こどく}は一体、どったらもんなんだが……¹⁹

妻^妻カガを亡くした旦那は『悔しい』と喋りながらも、つらい思いをした人は自分だけではないと続ける。広範に亘る被害を及ぼした東日本大震災は「つらい思いをした人」が自分のみではないという意識を抱かせる。しかし、その意識は抱える思いを吐露させることを阻み、人を孤独にってしまう。「つらい思いをした人はたくさんいる」という思いが自らと人々のあいだに引く分断線は、震災後に生じた分断線のひとつといえる²⁰。そして一般的に「被災地」と呼ばれる際には想起されにくい八戸が舞台となっていることで、被災の中心地ではないがゆえに、感情や心労を表出することのできない人の孤独が鮮明に提示されていると評価できる。八戸が舞台として選ばれていることの意義のひとつは、震災による心労や孤独が最も不可視化された地域から問題提起を行わせている点にあるといえるだろう。

しかし八戸が舞台となっている意義はそれのみではない。テキストは八戸と中央＝東京との関係を鋭く問題化する。それを確認するために、まず故郷八戸が津波に襲われる映像を東京で目にした将司に着眼する。40歳になって苦労して転職した会社を辞めざるをえなかった将司は「悪いのは適応できない自分のほうだと思うように」なり、「いつの間にか故郷ですごした年月を越えてしまったが、彼はいまだに東京という街になじめなかった」と語られる²¹。しかし故郷の八戸に居場所があるわけでもない。将司は父優作に地震の片づけの手伝いに来なかったことをなじられ、以下のような言葉を投げつけられる。

¹⁸ 木村友祐 『イサの氾濫』(未来社, 2016), p.36.

¹⁹ 木村友祐, 前掲書, p.62.

²⁰ 山崎ナオコーラ『昼田とハッコウ』(講談社, 2013/2015)でも同様の点に触れられている。そこでは「仙台、福島、郡山、と書店を回って、挨拶をしていった。出会った人に『大変でしたでしょう?大丈夫でしたか?』とお見舞いの言葉をかけても、『自分たちは大丈夫でした。もっと大変な方々がいいますから……』となかなか辛い話はしようとしないと述べられる。(引用は『昼田とハッコウ』下, 講談社, 2015), pp.199-200.

²¹ 木村友祐, 前掲書, p.20, p.24.

「い^{お前みたいな}がおんた東京もんは、ここまで聞いても、おら^{おらん}どの気持ちはわがんながべ」
そう言う 優作の声が 聞えた。
「…… あ？」
「い^{おらん}が^{もう}んどは、ハアあれだもん^な。震災なんてながったみてえに、せっせど金儲
げ、つづ げでらもん^な」
「そ²²ったらやづらど一緒にすんなじゃ」

「いがおんた東京もん」と「おらんど」は分断され、優作と子どものころから相いれなかった将司は「おらんど」の気持ちがわからない「東京もん」の側に位置づけられる。しかし将司は東京になじめず、仕事を辞めざるをえなかった人物であり、「東京もん」ではない。将司は「東京もん」と「おらんど」の両方と接点をもつが、彼には安住できる居場所がない。そのことを優作が「おら^{おらん}どの気持ちはわがんながべ」と突き放すことで、将司は改めて知ることになる。将司は八戸に戻ってきた当初、従兄の仁志と飲みながら「ここには『ひと』がいる、と思った。影の薄い体に厚みがもどってくる気がした。やっぱりもう、東京はよして、こっちにもどってこようか……？」²³と考えていたが、震災発生時に東京にいたことで「こっち」側には加われないことがわかる。それを将司はクラス会に参加したときにも感じるようになる。

みんなは沢田の話に聴き入り、その流れで、それぞれあの日の、自分が直面した地震の話をはじめた。似たような体験を共有するもの同士、「そうそうそう」と話題が次々生まれるのだが、座が盛り上がれば盛り上がるほど、将司は取り残されていった²⁴

将司は東京で津波の映像を見てただけで共有できる体験が存在しないために、故郷の同級生のあいだでも孤立してしまう。しかし将司は震災体験が共有できないために孤立しただけではなく「懐かしさにわくひとときが過ぎると、体は大きくてもクラスでとくに目立つ存在ではなかった彼に、みんなはそれ以上何を言ったらいいのかわからないふうである。彼のほうも、だれにどう声をかければいいのか思い当たらなかった。二十数年という時を一瞬に飛び越えて、またみんなにとっていてもいなくてもいい存在にもどりつつあるように感じて、彼は笑いを頬に張りつけたまま、隅のほうへ移動した」²⁵とも語られているように、震災以前からクラスの「隅」に取り残されていた存在であった。そのことを震災をきっかけに「はじめて」開催されたクラス会で改めて突きつけられたのである。

²² 木村友祐, 前掲書, p.62.

²³ 木村友祐, 前掲書, p.24.

²⁴ 木村友祐, 前掲書, p.75.

²⁵ 木村友祐, 前掲書, p.73.

将司は震災以前から八戸にも東京にも所属する集団をもたず、震災後に人々が体験を共有する輪にも入れず、自分が孤独であることを震災によって改めて突きつけられたわけである。では将司は、自らが居場所を持ってない理由をどのようにとらえているのだろうか。将司は自らのことを、自分に自信がもてず、ただいだけで許されているという安心感が欠けている人物として捉えていた。そしてその理由を父優作が自分を追いつめ続ける「悪意」に求め²⁶、その「悪意」は優作が「外の規範にばかりとらわれて生きてきた」ことによるものだと理解する。

テーブルを拳で叩いて激昂する優作を、将司は静かに見すえていた。一体だれの目を気にしているのか、外の規範にばかりとらわれて生きてきた優作という人物が透けて見えた。「空っぼ」という点で、優作と自分はつながっていたのだ²⁷

そしてここで重要なのは、「外の規範にばかりとらわれて生きてきた」優作も同じく「空っぼ」という点で自分とつながっていたと将司が考えていることである。八戸でも東京でも自分に自信が持てず「外の規範」に適応できない人物である将司は「自分自身にあいた穴」からとめどなく吹いてくる風を感じており²⁸、その点で彼が「空っぼ」であることは理解しやすい。では「外の規範」にとらわれる優作が「空っぼ」とはどういうことなのか。次節では「規範」と「空っぼ」の関係、そしてそこに東京との関係が絡み合っていることを明らかにする。

4 中央の規範に従順になる無意識の思考構造

優作の「空っぼ」を確認するために、テキストのなかで風が吹いてくる穴を持っていると将司に捉えられる人物である小夜子について確認したい。小夜子は将司にとって初恋の相手であり、クラス会に参加したのも小夜子に参加を促されたからであった。しかし小夜子が将司に近づいたのは「銀河の破魔水」という密教秘伝の技で「科学者もまだ発見していない、宇宙の命の源がら届いた粒子だけが、ギュッと閉じこめである」²⁹水をマルチ商法のような形で彼に売りつけるためであった。小夜子が救いのない宗教まがいのマルチ商法に捉われていることに対して岡和田晃は「このような救いがない台詞をも濁音を洗わず南部弁のままで書いてしまうところに、木村友祐の真骨頂がある」としたうえで「知覚をフルに稼働させ、その実態を細やかに描くことで、人間を縛り付ける同調圧力がいったいどこから来るのか(略)加害の起源を見定める歴史的な視座を得ようとい

²⁶ 木村友祐、前掲書、p.63.

²⁷ 木村友祐、前掲書、p.64.

²⁸ 木村友祐、前掲書、p.85.

²⁹ 木村友祐、前掲書、p.81.

う感応力の凄みがあるのだ」³⁰と重要な指摘を行っている。論者もテキストが「加害の起源を見定める」意図を持っているという岡和田の指摘に同意するが、ここではその起源が東京との関係にあることを明確にしたい。小夜子は「銀河の破魔水」を将司に売ろうとする前に以下のようにこぼしていた。

「あたしだちって、東京の人に、『お荷物』と思われだりしてないの?」

「え、どういふごど?」

「だって、復興だなんだって、東北^{とうほく}にたくさんお金使うでしょう?

節電もしなきゃなんないし。もしそう思われでるなら、なんか申し訳^{わけ}なくて」

「なんでそつたらごど、気にすんだよ。する必要ないよ。『お荷物』っていうんな

ら、思いっきり『お荷物』になったらいがべな」³¹

東京の「お荷物」となっていないかを心配する八戸の小夜子は、自らが苦境におかれているにもかかわらず東京に対して申し訳なさを感じている。そして将司が言うように「思いっきり『お荷物』」になれない小夜子は頼るものを持たないため、仕方がなく「銀河の破魔水」のような宗教まがいのもので自らを支えざるを得ないのである。そう考えれば小夜子を救いのない極地へと追い込んだ加害の根源には、無自覚に東京を中心に思考してしまう構造があるといえるのではないだろうか。そして無意識に東京を主としてしまう思考の構造は小夜子以外にも指摘できる。八戸の元クラスメイトたちの姿を確認してみよう。

沢田は腰をやや落として両手を開き、「ヨオーツ」と声を張り上げた。

「がんばれニッポンっ!」

パンツ、と手を打つ音が高らかに響き、すぐに「イエーイ」「ニッポンがんばれー」「東北がんばれー」などという声や口笛や拍手がつづいた。将司はクラクラと血の気が引くような思いで部屋をでた。そして靴を履くなり階段を駆け降り、店を飛びだした。(略)やめてくれ、やめろ。よりによってなんでお前らが、そんな空虚な文句を唱和しなきゃならないのか。しかもなんでそんな、「ニッポン」などという実体があるようでないものと一体化しようとするのか。なんでみんなそこまで従順なのか。人がよすぎるのか。卑屈なのか³²

引用はクラス会が解散しようとする場面である。八戸の元クラスメイトは「ニッポン」と一体化し、「ニッポン」の側から「東北がんばれー」とエールを送ることが他意なくできてしまう。そして、その背景には震災後の東京において「ニッポン」に同一化しエー

³⁰ 岡和田晃「『がんばれニッポンっ!』という空白を埋める——木村友祐『イサの氾濫』——」(『反ヘイト・反新自由主義の批評精神——いま読まれるべき<文学>とは何か——』寿郎社, 2018), p.308.

³¹ 木村友祐, 前掲書, pp.78-79.

³² 木村友祐, 前掲書, pp.89-90.

ルを送ることが善意とされる規範が成立していたことが関係する。そのことについてテキストでは以下のように言及されている。

将司は、東京にいて不思議だった。震災後は、だれもが急に善良な人になっていた。テレビCMを筆頭にいきなりみんな「日本人」意識にめざめて連帯を口にし、これまで東北のことなど見向きもしなかったくせに、貧しさのイメージが余計に同情をそそののか熱いエールを送りはじめた。ホントかよと言いたかった。でも、それを口にできない空気が満ちていた。善意も連帯もそれ自体は非難すべきことではない。が、だからこそ余計に、うのみにできない妙な違和感を感じるのだった³³

震災後、東京では「日本人」意識にめざめて、これまで見向きもしなかった東北に向けてエールを送り、連帯を口にしはじめた。そしてそのことを批難できない「空気」があったとされる。批判し難い善意や連帯という形を取り、それが「正しい」ことであるという規範が成立してしまっていたからである。もちろんそれは作中で角次郎と将司の母晴海が「(略)遠くが『がんばれ』って言やあ、本人は気が済むがもしんねえけど、がんばんのは結局おらだちだべ」、「そう言われれば、たしかに、どっかで苦勞を押しつけられでるおんた³⁴」と批判するように東京が自分を満足させるために作り上げた規範にはほかならないが、角次郎や晴海、将司のように中央が成立させた規範に対して批判する視座を持てる人間ばかりでないことをクラスメイトや小夜子、そして規範にばかりとらわれ、自分自身を持たない「空っぽ」である優作の姿が示している。

がんばるのも、苦勞を押し付けられているのも東北に住む人々であるにもかかわらず、「ニッポン」に同一化してエールを送ってしまうクラスメイトは中央＝東京を中心に無自覚のうちに思考しているとえる。そしてエールを送ることは「善意」とされるため抗うことも難しい。さらに東京の自己満足に過ぎない規範の外側へと追いやられてしまった将司のような人物はクラスメイトの輪からのみならず、「ニッポン」からもはじき出され、不可視化されてしまうのである。災害時に既存の社会規範が強化され、規範の外側に位置づけられる人々が平時以上に疎外されることは多々指摘されてきたことであるが³⁵、ここでも「ニッポンという実体があるようでないもの」の存在が震災後に強化され、そこにはまらない存在が不可視化されているさまをみることができる³⁶。

³³ 木村友祐、前掲書、pp.57-58.

³⁴ 木村友祐、前掲書、p.58.

³⁵ 文学においては木村朗子が、沼田真佑『影裏』(2017)について「震災などの非常時には、異性愛規範(ヘテロノーマティヴィティ)が自ずと強化される。それはセクシャルマイノリティの存在が平時にも体よく無視されて、社会にインクルーシブなかたちで包括されてはおらず、したがって非常時ともなれば、もともと目に入っていなかった存在は考慮にも入れられないせいだ。(略)『影裏』が暗示するセクシャルマイノリティの家族関係は、非常時の孤独を淡く連想させる」と述べ、「非常時には、因習的なジェンダー規範もまた強化される」として垣谷美雨『避難所』(2015)を取り上げていることが参考になるが、「イサの氾濫」の将司も平時・非常時を問わず社会に包括されていない人物であるといえるだろう。(木村朗子『その後の震災後文学論』青土社、2018)、pp.48-49.

³⁶ 当該場面は単行本収録時に加筆された部分であり、初出時には沢田が「がんばれニッポンっ!」と声を張り

そして元クラスメイトのように「ニッポン」に同一化し、自らも東北の一端に住んでいながら、「東北がんばれー」と自分ではない誰かにエールを送っている様子からはさらなる問題が読み取れる。この様子は東北から自らを無自覚に切り離してしまう態度であるといえ、それは震災後の東北に起こっている問題を、自らとは関係のないものとして切り離していることをも示している。「ニッポン」に同一化することで、震災後に生じた問題の「当事者」＝「東北」であることから離脱していく態度は、問題を抱えている「当事者」をさらなる孤独に追い込むことになってしまう。つまり同じ東北に住むもの同士のあいだにも、自らを震災後の「当事者」＝「東北」の側に位置づけるか否かによって、分断が起こっていることがわかる。そして元クラスメイトは震災を話題にするものの、福島原子力発電所の問題を話題にすることがないように、同じ震災を経験した東北の人間ではあっても、原発を自らの問題として捉えることはない。自らを「当事者」の側に位置づけなければ、それは他の誰かの問題に過ぎないからである。そのことが問題を抱えた「当事者」の孤独を強固なものにしてしまう。八戸で経験されている孤独は八戸のみに留まるものではない。福島県をはじめ東北の各県で起こっているということが、東北へと視線を拡大することでみえてくるのである。

5 中央＝東京中心の思考に抗うために

では「ニッポン」への同一化に抵抗し、中央＝東京を中心とする思考から脱し、問題を抱えている当事者を孤独から救うためにはどうしたらよいのだろうか。その方法を明らかにするために、将司が叔父イサのことを小説に書こうとしたことにまず着眼したい。荒くれ者で前科者でもある叔父イサを夢に見るようになった将司は、不思議に魅入られるように叔父のことが頭から離れなくなり、小説でも書いてみようと思う³⁷。そして実際に小説を書いてみると「うまく言葉がでてこないもどかしさ」はあるが、「プラモデルをひとつずつ組み立てていくようなわくわく感があった」³⁸と語られる。伝聞でしか知らない叔父イサの人物像を造形していくことに将司は楽しさを感じている。さらに父優作の友人である角次郎がイサを蝦夷に見立てた際には、将司は「興奮をおさえきれ」ず、「それが事実だとか、叔父の暴力の由来をあかすもののだとは彼も思っていない。しかし、なぜだか、叔父と蝦夷をつなげて考えたいという強烈な誘惑にはあらがえなかった」³⁹とまで語られる。将司は、荒くれ者で権力に反抗するイサという人物像を作り上げたいと熱望している。そのため、暴力を振るうも身内にはそれを向けるこ

上げるのみである。注16に前掲した岡和田が述べているように、加筆によって震災後の「ニッポン」への同一化の気運の高まりがより強く示され、それへの抵抗の必要性がより明確になっている。

³⁷ 木村友祐、前掲書、p.13.

³⁸ 木村友祐、前掲書、p.38.

³⁹ 木村友祐、前掲書、p.48.

とができなかったという、想像していた人物像とは違う一面を母の晴美から告げられた際には「できれば認めたくなかった」⁴⁰と述べ、脳梗塞の後遺症で麻痺した左手を抱え、不敵な面構えを消して何かを放棄したような顔つきでいる現在のイサの姿を幻視した際には「認められなかった。それは将司の思い描いた叔父の姿ではなかった」⁴¹とはっきりその姿を拒絶している。将司にとってイサは権力に対する荒くれ者、蝦夷のような「まづろわぬ人」⁴²でなくてはならなかった。なぜならそれが現在の東北に必要なからである。その必要性はすでに角次郎によって示されていた。

あいつど蝦夷をつなげで考える飛躍^{ひやく}ってのも、おもしろいどは思う。今の東北には、あいつみてえなやづが必要だどいう気もするし(略)こったらに震災と原発^{げんぱつ}で痛い^{いた}めつけられでよ。家は追んだされるし、風評被害だべ。(略)そったら被害こうむって、まっと^{もっと}苦しさを訴えたり、なあしておらんどがこったら思いすんだって暴れでもいいのさ、東北人^にづのあ、^とうのはすぐにそれができねえのよ。取材^{あいて}にきた相手^にさも、^{きづが}氣遣いかげたぐねえがら、無理して前向きなごど言うのよ。新聞もテレビも、^{はなご}喜んで^{ばかり}そういう部分^{ばかり}ばり伝える⁴³

おらんど苦しさを訴えてよいにもかかわらず、東北人は「氣遣いかげたぐねえ」と前向きなことを言ってしまう。そして「苦しさを訴えたり」できない姿は、既に確認したとおり小夜子の「あたしだちって、東京の人に、『お荷物』と思われだりしてないの?」という発言に連なる思考であるといえる。「氣遣いかげたぐねえ」と思う気持ちや自らを「お荷物」とする東京を中心とした思考は、助けを求める声を封殺してしまう。だからこそ東京に向かって苦しみを暴れるようにして訴えることのできる、「悪いのはお前らだと決めてかか」り、「生きるために、自分を生かすために、怒りも不満も痛みも、身勝手に外へぶつけた」と将司が考えるイサ像⁴⁴が現在の東北のために造形される必要があったのである。

そして、イサ像が八戸のみならず、「東北」のために想像されている点には注意したい。将司は想像のなかで造形したイサ像を体現することで、蝦夷と呼ばれた部族になり、「美德とされた忍耐などかなぐり捨てて、蔑まれ利用されてきた者の積もり積もった怨念」をぶちまけるため、「怒り」の矢を降らせるために東京を目指して南下していくのだが、その過程で震災で主な被害を受けた岩手・宮城・福島⁴⁵の各県に言及される。

——おらが、イサだっ！(略)気がつけば彼は、夜の森のなかにいたのだった。蝦

⁴⁰ 木村友祐、前掲書、p.67.

⁴¹ 木村友祐、前掲書、p.86.

⁴² 木村友祐、前掲書、p.47.

⁴³ 木村友祐、前掲書、p.49.

⁴⁴ 木村友祐、前掲書、pp.69-70.

夷と呼ばれた部族として、馬に乗って駆けていた。(略)すると彼は、周りにいるだれもが自分と同じイサだと気がついた。顔や体格はちがっても、草原を突っ走る者全員がイサになっていた。大義のために動くことのないイサだが、このときばかりは同じ目的のために集まってきたのだ。青森を抜け、岩手に入るとその数は格段に増えた。宮城ではさらにふくれ上がった。(略)福島を走ると、どこからともなく白いつなぎに身を包んでいる者らが大量に加わった。防護マスクに覆われた彼らの表情はわからないが、体からはただならぬ殺気が発散されていた。東北各地から、またさらに全国各地からも湧きだすように集まったイサたちは、もはやどれだけの規模かわからないほどの多さで地上を埋めつくした。(略)「おらがイサだと思ふやづは、悔しいやづは、みなか^{加われ}だれっ！」⁴⁵

八戸で経験されていた孤独の問題を解消し、それをもたらした東京との関係を破壊するために南下していく将司と「同じ目的」のために、岩手、宮城、福島、そして最終的には全国各地からイサとなりうる者が合流している。それは震災後に八戸で経験されていた問題と中央との関係は八戸だけの問題ではなく、震災で大きな被害を受けた東北各県やひいては全国各地にも共有できることを示している。ここに孤独を解消する可能性をみることができると考える。生きるために怒りや不満や痛みを外へぶつけようとする者は、誰もがイサとなりうる。そしてひとり孤独に駆け始めたとしても、同胞を発見し、同じ部族として疾駆する隊列を形成する可能性をもつ。人の孤独は多様であり、震災後に生じた孤独も同様であるが、孤独の苦しみやそれをもたらしたものへの怒りや悔しさを外へ叫ぶことで、その叫びに共鳴するものが加わる可能性がある。

「ただならぬ殺気」をまとっている福島から合流した人々がイサの隊列に加わっていることから、福島に住む人々が抱える問題は「白いつなぎに身を包んでいる者」だけが直面している問題なのではなく、角度を変えることで「東北」全体で共有できる怒りや苦しみであることを示している。一地域のみでは孤独に抱え込まざるをえない問題や思いを「東北」へと拡大することで、共有されうるかもしれない可能性がここでは示される。そしてその可能性は、ひとつの地域を超えて叫ばれた怒りを共有し、共に叫び、その叫び声を大きくしてくれる人の存在にかけられている。新聞に載ったカガを亡くした旦那の『悔しい』という言葉に「その孤独は一体どつたらもんなんだが……」と寄り添おうとした角次郎の態度を思い起こせば、孤独に寄り添おうとする者がいることがわかる。抱えた孤独を理解し、怒りに耳を傾けて共に叫んでくれるであろう人に向けて、孤独を解消するために「叫べ」と将司は訴えるのである。

ただし叫ぶためには、卑屈なまでに東京を中心とした「ニッポン」に従順になってしまふ「美徳とされた忍耐」をかなぐり捨てる必要がある。そのために「イヤなものはイヤど、思いっきり、^叫べ」⁴⁶と叫ぶことを促す「イサ像」を造形する必要があり、蝦夷の記

⁴⁵ 木村友祐、前掲書、pp.91-93.

⁴⁶ 木村友祐、前掲書、p.94.

憶とイメージがそのために「借用」されるのである。そして重要なのは蝦夷の「まづろわぬ人」のイメージであるため、ここでは歴史の正確性は問題にされない。

蝦夷が毛皮以外に何を着ていたのか——ほんとうに毛皮を着ていたのかも、彼は知らない。知らないから、毛皮の下には黒い伸縮素材の肌着を着せている。どうやらそれは、某衣料品メーカーのヒートなんかのようにも見える。毛皮ではなくブルーシートや空き缶だのペットボトルをまとっている者もいる。蝦夷が馬に鞍をつけていたのか、手綱とあぶみで馬を操っていたのかどうかもわからないのに、おのずとテレビの時代劇で見た騎馬姿になっている。が、うしろにつづく仲間たちを先導する今の彼にはそんなことはどうでもよかった。寄せ集めのイメージをありったけまとめて、憤怒の形相で前へ前へと突進していた。⁴⁷

蝦夷のイメージを「借用」して怒りを表明することがここでは重要であるため、実際の蝦夷がどうであったのかは問題にされない。そして正確性が問題にされないがゆえにブルーシートや空き缶やペットボトルしか準備できなくとも、手持ちのもので隊列に加わることができ、富や階層によって排除される者が生じ得ない。現に隊列には「あばら骨が浮くほど痩せた牛、豚、犬や猫までも一緒になって走って」⁴⁸いる。イサや蝦夷の正確な実態を把握せず、寄せ集めのイメージによって隊列を組織せざる得ない将司の姿からは、怒りを表出する方法を早急に構築しなければならない緊急性を読み込むことも可能であるが、隊列に蝦夷であるための正確さを求めないことで、住んでいる場所や人間か動物の区別を問わず、誰もが参与でき、孤独を救うことができるよう構成されている点も看過してはならない。

6 「イサの氾濫」の文学テキストとしての可能性

しかし、ここで形成される隊列は想像上のものであり、また一過性のものにすぎず、持続性に欠けているものであるかもしれない。テキストはその点にも自覚的である。想像上で将司がイサになった後に、テキストは「現実」へと再度視点を戻している。

重量感のあるその声が、信号が変わったのにも気づかずに通りの交差点に飛びだした将司の頭のなかで生々しく鳴り響いていた。生きるために叫べ。途端にタイヤがアスファルトをこする鋭い音が次々起こり、将司は反射的に車をよけようとして体勢を崩し、路面に転がりこんだ。すんでのところで轢かれなかったが、先頭の二台の車はけたたましくクラクションを鳴らした。車列の後方では追突したとおぼしき鈍い衝撃音が連続して立ち、だれかが車を降りて「このバガッこ、何考えでっ

⁴⁷ 木村友祐、前掲書、pp.91-92.

⁴⁸ 木村友祐、前掲書、p.93.

きや！」と怒鳴った。(略)一斉に飛び交った甲高いクラクションの音や怒号がどうやら自分に向けられたものらしいとは漠然と感じていたものの、どこかで集結したイサたちががなり立てる声のようにも聞いていた。(略)何がどうなったのか、自分がどこにいるのかもわからなくなるなかで、将司は湧き起こった怒りの音と声を受け止めるように両手を広げ、声をかぎりにわめいていた。

「叫べええっ！さあがあべえええっ……！」⁴⁹

想像のなかで将司は孤独を抱え込んだ人をイサの隊列へと誘い、孤独を解消し、中央＝東京への反逆を可能にしていたが、実際には将司の頭のなかのみで完結する、信号の変化が目に入らなかったことが示すような、現実をみないことで成立する一時的な夢物語であったようにみえる。しかしそれが夢物語であったとしても、自分に向けられるクラクションの音や怒号を「イサたちががなり立てる声」と解釈しているように、将司にとっては現実の捉え方を変えるものとして作用している。それは小夜子の現在を嘲笑した元クラスメイトの「トカキン」に「このドリル金玉」と吐き捨てるように言った後、殴りつけた将司の姿からも確認できる⁵⁰。その姿は「おらが、イサだ」という思いが結晶化した後のものである。つまり自分がイサとなって隊列を組む姿が夢物語であったとしても、その夢をみた将司には、単なる夢物語に留まらず、現実を読み替え、動かそうとする力を与えているのである。そのことに可能性をみることはできるはずである。将司が想像した物語によって現実での行動を変えていったように、将司以外の人々にも物語が共有されることで、人々の行動に力を与えるかもしれない。「イサの氾濫」は将司の一時的な夢物語を読者と広く共有し、現実を変えていく可能性にかけられたテキストともいうことができるだろう。

その可能性を体現したのが歌手の白崎映美である。白崎は東日本大震災以後に同じ東北出身のミュージシャンを中心に「東北6県ろ～るショー!!」を結成し、全国でライブ活動を行っているが、その活動をはじめたきっかけに「イサの氾濫」があったことを述べている。

被災地のために「なにかしたい」と思っても、なにをしたらいいのかわからず、モヤモヤしたまま初めの一步を踏み出せずにいて。そんなある日、朝日新聞の書評を見ていたら、青森県八戸出身の木村さんの『イサの氾濫』というのが紹介されていたんですよ。

それですぐに図書館に行って、『すばる』に載っている『イサの氾濫』を探して一氣に読んだら、もう東北の血が逆流するような気持ちになってしまっ。それを、周りの人に伝えまくり、「バンドやろう！やっぱりオラはバンドだ！」って⁵¹

⁴⁹ 木村友祐, 前掲書, pp.94-95.

⁵⁰ 木村友祐, 前掲書, p.88.

⁵¹ 黒田隆憲. 2017年4月27日作成. 白崎映美インタビュー 被災者や路上生活者も癒してきた歌手人生. 株式会社CINRA. 2019年4月19日閲覧. <<https://www.cinra.net/interview/201704-shirasakiemi>>.

白崎は未来社から刊行されている単行本『イサの氾濫』の帯文にも「血が騒ぎ、肉踊り、細胞興奮逆流し、泣きながらオラは立ち上がって叫んでいた。んでオラは今のバンドつづったんだぜ！[/]暴れるんだ！イサど」⁵²と記している。「イサの氾濫」が白崎に被災地のために「なにかしたい」という思いへ力を与えたことがここからわかる。将司が形成したイサの隊列も、またそれを描いた「イサの氾濫」という文学テキストも、現実に対して直接は無力であるかもしれない。しかしその夢物語は将司自身の現実の捉え方や行動を変え、「イサの氾濫」の読者であった白崎の行動を促したのである。想像を単なる想像として片づけることはできず、それが文学テキストとして示されたときに持ちうる可能性を「イサの氾濫」は体现しているといえるだろう。

またテキストを構成する言葉にも注意する必要がある。作中で「叫べ」と述べられる際には「さがべ」とふりがなが添えられているのである。つまりイサと将司は南部方言で叫ぶことを促しているのである。自らが置かれた劣悪な境遇を怒りとともに告発する叫びを、わざわざ日本の大多数が共有している言葉にあわせて行う必要はない。相手の言葉にあわせてしまうことこそが、将司が問題にしてきた「従順さ」なのである。そしてそのような「従順さ」が、将司がかつて東京では「自分が青森生まれだということが知られれば迫害されるとでもいうように、決して訛りをださなかった」⁵³ように、小夜子が自分たちを「お荷物」と思っていたように、「卑屈さ」へと転じ、青森／八戸の間であることを「恥じる」態度を形成し、東京を中心に青森／八戸を劣位に置く構図を温存させてきたのである。その構図を内面化してしまう「卑屈さ」にも将司の怒りは向いている。将司が「叫べ」というときには自らの感情を殺し孤独に陥ることを救うと同時に、東京と青森／八戸の優劣の構図を保持したまま「ニッポン」へと同一化していく人々の態度を問題にし、東京に「従順」に振る舞う態度を怒りへと変えていくことを求め、その構図を改革することを企図しているのである。

そして八戸と東京のあいだに現前する南部方言と「標準語」という言葉の問題も考えなければならない。杉江扶美子は南部方言について「『イサの氾濫』の南部弁は会話に限られ、さらに標準語の訳がふりがなのように添えられ、東北と東京の壁は絶対的なものとしては描かれていない」⁵⁴としているが、ふりがなを添える「翻訳」を通してしか「言葉」を共有しない者には、震災後の孤独が理解されず、怒りが届かないと読むべきではないだろうか。八戸の怒りも孤独も南部方言でなされる会話そのままでは言葉を共有しない地域の人々に理解されない。しかし自らの言葉ではなく共通語を用いることでは「従順さ」を穿つ企図が達せられない。「従順さ」を打ち破り、怒りを突きつけることと、八戸が置かれた孤独を広く伝えること。この二点を同時に達成するために南部方言で記述さ

⁵² 白崎映美「帯文」木村友祐（『イサの氾濫』未来社、2016）。

⁵³ 木村友祐、前掲書、p.25。

⁵⁴ 杉江扶美子「向こうからの声たちと小説をこえて——いとうせいこう『想像ラジオ』と木村友祐『イサの氾濫』において——」（『比較日文学教育研究部門研究年報』14、2018.3）。

れた文章には「標準語」の訳をふるという方法が取られたのではないだろうか。八戸が「ニッポン」の周縁に置かれた現状を怒りとともに告発し、八戸の人々の苦しみや孤独が他地域の人々にも伝わるよう、怒りを「翻訳」しているのである。

「イサの氾濫」は八戸が言葉の面からも中央から隔てられていることを鋭く指摘しているが、それが明瞭に浮き上がっているのは「イサの氾濫」が文学テキストであるからだといえるだろう。言うまでもなく文学テキストを構成するのは言葉である。南部方言と「標準語」が織り交ぜられることで、「標準語」が併記されることでしか八戸の人々の心情を理解できないという、用いる言葉の優劣の関係がテキストを読むことで自動的に体感される。言葉における優劣の構造を、読むことで体験させている点からも、「イサの氾濫」が文学テキストとして優れているといえることができるだろう。

7 おわりに

本稿は東日本大震災後の状況を踏まえ、震災の原因を代替したり近／未来の日本に時間軸を置き換えたりすることで「被災地」を作り出す小説が、巨大な権力の一方的な経済的利益の搾取構造を描こうとする目的をもっていることをまず明らかにした。しかしそれだけでは現実の具体的な「被災地」に触れていないため、搾取の構造が生じた原因やそれを克服する契機が見いだせないことを指摘し、その問題点を乗り越えるために木村友祐「イサの氾濫」を取り上げた。「イサの氾濫」は東京と八戸のはざままで思考しながら、どちらにも所属する場所をもたない将司を視点人物にしながら、「被災地」に不可視化された孤独があることを描いており、中央＝東京を中心とした思考が八戸や、ひいては東北に住む人々を分断し、孤独をより強固なものにしていることを指摘した。そしてそれを乗り越えるために、八戸から東北へと視線を拡大し、蝦夷というイメージを「借用」して怒りを表明するという方法が取られていることを明らかにし、それが単なる夢物語に終わらないことをテキストの内外の出来事から論証した。

そして中央＝東京との搾取・被搾取の関係に「言葉」の問題が大きく関わっていることを浮き上がらせた点を「文学テキスト」としての「イサの氾濫」が持つ重要性として評価した。中央に同一化して唱えられる「がんばれニッポンっ!」という言葉も「標準語」であり、自分たちの「言葉」ではない。無意識のうちに自分たちの言葉ではなく中央＝東京が用いる「標準語」で思考し、訛りがある自分たちの言葉を恥ずかしく思い、中央＝東京に無意識のうちにあわせてしまう「従順さ」を打ち破ることがなくては、怒りを適切に表明することができない。そのため「まづろわぬ人」である蝦夷のイメージを「借用」して、南部方言で叫ぶことが重要な意義を持つのである。

木村友祐がデビュー以来、東北弁にこだわり、東京に代表される中央の価値観を相対化しようとしてきたことへの指摘は既に岡和田晃が詳細に行っている⁵⁵ため、ここでそ

れを繰り返すことはしない。しかし東日本大震災との関係で触れておく必要がある木村の言葉がある。青森近代文学館にて2018年7月14日(土)から9月24日(月)まで行われた「特別展 平成の青森文学」にて木村は「逆噴射した身体という言葉」という文章を寄稿している。そこで木村は、大学生の時に八戸から東京へ進学した際のことを「郷里にいたときよりも身を縮こめていたのではないか。日陰を選んで歩いていたような印象がある」と述べたうえで、「その大きな要因は、言葉だった。ぼくの舌と喉の筋肉に刻み込まれた青森言葉の単語と発音が飛びだすのを恐れ、うちとけて人と話すことができなかった」と回顧している。「イサの氾濫」の将司を思わせる木村の言葉であるが、重要なのはその文章の最後で木村が以下のように述べていることである。

東日本大震災の惨禍をへて、「東北」という言葉は全国に浸透した。ふと気づけば、東北の青森出身であることに以前ほど引け目を感じることがなくなったのは、なんとも皮肉なことだと思う⁵⁶。

東日本大震災後、東北が中央＝東京から経済的な搾取を受けていたことは広く認識されるようになった。震災という惨禍をへたことで、これまで抑圧を被ってきた東北に対する注目が以前よりは増加し、それによって明らかになってきたことも多分にある。そして東北を抑圧する原因のひとつに「言葉」の問題があるのならば、それを考えることは「文学」が担うべき仕事のひとつであるだろう。「言葉」の視点から東北、あるいは震災後を考える重要性を提起したテキストとして「イサの氾濫」があることは、改めて強調しておきたい。

参考文献

- 岡和田晃 (2018)『反ヘイト・反新自由主義の批評精神——いま読まれるべき〈文学〉とは何か——』、北海道：寿郎社。Okawada, Akira (2018) *Hanheito Hanshinzyushugi no Hihyou Seishin: Ima Yomarerubeki Bungaku toha Nanika*. Hokkaido: Jurosha.
- 恩田陸 (2017)『錆びた太陽』、東京：朝日新聞出版。Onda, Riku (2017) *Sabita Taiyo*. Tokyo: Asahishinbunshupan.
- 江島周 (2017)『災神』、東京：角川書店。Ezima, Shu (2017) *Saizin*. Tokyo: Kadokawashoten.
- 木村朗子 (2013)『震災後文学論』、東京：青土社。Kimura, Saeko (2013) *Shinsaigo Bungakuron*. Tokyo: Seidosha.
- 木村朗子 (2018)『その後の震災後文学論』、東京：青土社。Kimura, Saeko (2018) *Sonogo no Shinsaigo Bungakuron*. Tokyo: Seidosha.
- 木村友祐 (2016)『イサの氾濫』、東京：未来社。Kimura, Yusuke (2016) *Isa no Hanran*. Tokyo: Miraisha.
- 木村友祐 (2018)『逆噴射した身体という言葉』、『特別展 平成の青森文学』、青森：青森県文学館協会、pp.20-21。Kimura, Yusuke (2018) *Giyakushyoushiya sita Shintai no Gengo*. In *Tokubetuten Heisei no Aomori Bungaku*, edited

55 岡和田晃「夷を微かに希うこと——向井豊昭と木村友祐」(『反ヘイト・反新自由主義の批評精神——いま読まれるべき〈文学〉とは何か——』寿郎社、2018)、pp.247-273。

56 木村友祐「逆噴射した身体という言葉」(『特別展 平成の青森文学』青森県文学館協会、2018)、p.21。

- by Aomoriken Bungakukan Kyokai. Aomori : AomorikenBungakukanKyokai. pp.20-21.
- 桐野夏生(2016)『バラカ』, 東京: 集英社. Kirino, Natuo(2016) *Baraka*. Tokyo : Syueisha.
- 島田雅彦(2017)『カタストロフ・マニア』, 東京: 新潮社. Shimada, Masahiko(2017) *Katasutorohu Mania*. Tokyo : Shinchosha.
- 杉江扶美子(2018)「向こうからの声たちと小説をこえて——いとうせいこう『想像ラジオ』と木村友祐『イサの氾濫』において——」『比較日本学教育研究部門研究年報』14号, pp.106-111. Sugie, Fumiko(2018) Mukou karano Koetati to Shosetu wo Koete : Ito, Seiko *Sozorazio* to Kimura, Yusuke *Isa no Hanran* noite, *Hkakunihongakukilyoukukenkilyuubumonkenkilyuunenkan*, 14, pp.106-111.
- 千葉一幹(2016)「人は震災にいかに向き合ったか——メランコリー・カタリ・喪の作業——」『文学界』, Bungakukai, 70(11), pp.194-222. Chiba, Kazumiki(2016) Hito ha Shinsai ni Ikani Mukiattaka, Bungakukai, 70(11), pp.194-222.
- 山崎ナオコーラ(2013/2015)『屋田とハッコウ』, 東京: 講談社. Yamaseki, Naoko-ra(2013/2015) *Hiruta to Hakkou*. Tokyo : Koudansha.
- 菅啓次郎(2016)「巨大な次回作を予感させる」『図書新聞』3259, 2016.6 Suga, Keijiro(2016) Kyodai na Jikaisaku wo Yokansaseru. *Toshyoshinbun*, 3259, 2016.6.
- 「文芸月評——震災と向き合う中短編 生活者の視点、近代史の観点——」『読売新聞』(2011.11.22. 朝刊). Bungei Geppyou : Shinsai to Mukiau Tyutanpen Seikatusya no Shiten Kindaishi no Kanten, *Yomiurishinbun*, 2011.12.22.
- 「回顧 文芸」『朝日新聞』(2016. 12. 7. 夕刊). Kaiko Bungei, *Asahishinbun*, 2016.12.7.
- 黒田隆憲, 白崎映美インタビュー被災者や路上生活者も癒してきた歌手人生, 株式会社CINRA, 2017年4月27日閲覧. Kuroda Takanori(2017). Shirosaki Emi interview Hisaisya ya Rozilyouseikatusya mo Iyasitekita Kasyuzinsei. Kabusikigaisya CINRA. Access date : 2019.4.19. (<https://www.cinra.net/interview/201704-shirasakiemi>)

加島正浩 Masahiro KASHIMA

(日本)名古屋大学文学研究科博士後期課程。日本近現代文学。主著に「『非当事者』にできること——東日本大震災以後の文学にみる被災地と東京の関係——」(『Juncture—超域的日本文化研究—』8, 2017)、「震災後の都市の変革可能性——荒俣宏『帝都物語』から京極夏彦『虚実妖怪百物語』へ——」(『原爆文学研究』17, 福岡: 花書院, 2018) など。